

中国鍼灸歌賦について

浦山 きか

北里大学附属東洋医学総合研究所 医史学研究部

「鍼灸歌賦」とは、鍼灸に関する内容を有韻の文として整えたものである。一句何言と揃えてあるものを「歌」、揃えていないものを「賦」と呼び習わし、無韻のそれは「訣」と称されることもあった。

まず、医書における有韻の文の歴史を概観する。中国の伝統的な医学を伝える『黄帝内経』は散文で記されているが、部分的に有韻の文を含む。晋の王叔和(三世紀)の『脉経』には「脉法讚」という四言二十八句の歌訣が収録されているが、その内容は六部定位診の要諦をまとめたものである。「脉法讚」は、音韻学的にみれば上古音・中古音いずれの体系に拠っても押韻が整えられていることがわかる。「脉法讚」は初唐の孫思邈(五八一～六八二)の医学全書的著作である『備急千金要方』巻二十八・五臓脉所属第四にも収録されており、時代を超えて広く流布した歌訣は、その内容もさることながら、音韻体系の変化にも対応し得るものであったと考えられる。

宋代には、許叔微(一〇七九～一一五四、真州の人)の『傷寒百証歌』が編まれた。ほぼ全篇にわたって七言の歌訣形式を中心に構成されている。内容は傷寒の病に対する治療法を連ねたものであり、術語が多いために四字句では間に合わず七言詩が選択されたと思われる。

明初、洪武二十一年(一三八八)年、劉純(十四世紀、一説に一三五八年生～一四一八卒)によって著された『医経小学』は全六巻、二百首に近い歌訣が収められ、各歌の題下に、基となった書籍・資料を注す。この注は歌訣の製作過程を明示し、元末明初の時代に歌訣が整えられたことをも示唆する。

金代以降、「鍼灸歌賦」と称される、鍼灸に独特な経穴や経脈などの内容を持つ歌賦が整えられ、鍼灸における経穴歌や症状を読み込んだ歌が流行した。歌賦を収録する以下の鍼灸書において比較する。

- 『子午流注鍼経』 金・閻明広 貞元癸酉(一一五三年)頃「流注指微鍼賦」を得る。
- 『扁鵲神応鍼灸玉龍経』 元・王国瑞 天曆二年(一三二九年)より四十年程前成書。
- 『鍼経指南』 金元・竇漢卿(一一九六～一二八〇年) 皇慶壬子(一三一二年ごろ)刊行。
- 『医経小学』 明・劉純 洪武戊辰(一三八八年)編成。
- 『普濟方』 明・朱瀝 洪武庚午(一三九〇年)編成。
- 『鍼灸大全』 明・徐鳳 成化～正徳(一四六五～一五二一年)成立。収録する「金鍼賦」序に「正統四年(一四三九)」。
- 『鍼灸聚英』 明・高武(嘉靖年間に武挙) 嘉靖己丑(一五二九年)成書。
- 『楊敬斎鍼灸全書』 明・陳言 万曆辛卯(一五九〇年)刊行。
- 『鍼灸大成』 明・靳賢 万曆辛丑(一六〇一年)刻。

鍼灸書として歌賦を最大に収録するのは『鍼灸大成』であり、賦は十、歌は八十二を数える。上記鍼灸書において三書以上に収録された賦は「標幽賦」「流注指微針賦」など十首、歌は「長桑君天星秘訣歌」などの三十首ほどにとどまる。歌訣を内容から分類するならば、経脈・経穴を歌うもの(「十二経脈歌」など)、治療法に関わるもの(「補瀉雪心歌」など)、日忌を含めて主に治療における禁忌を記すもの(「禁鍼穴歌」「禁灸穴歌」など)である。

歌賦の記す治療の実効性についてRCTによる確認はなされていないため、歌賦の流行と保存に実効性が関与したか否かを判断することは現状ではできない。音韻学的に見れば、特に流行した歌賦は、音韻体系の変化にも対処し得るよう押韻が整えられており、そこで確保された口調のよさが流行につながったと推測できる。術語の拘束下において文学的な歌賦の規則を取り入れながらも可能な限り押韻する傾向があり、口調を整え暗誦に役立てる工夫が施されてきたことは看取できると思われる。